

一九九九年

一月

早春

西方の荒磯砕く早春の翡翠の碧の波頭真白き  
金鱗の細かき輝き風もなき川内川の浅き春かな  
山茶花の紅も名残の街道に紫尾連山の山陰淡し  
雨上がり重ね伏したる枯れ草にきらめく光ははや春の色

二月

姑病む

病室に声なく伏せる姑の鬢れし頬に冬日かすかに  
熱ありて食を拒めば卒寿なる姑ははや枯れ草の如し  
半月の入院の後に戻りたれど赤子となりて眠れる姑  
夫付けしあだ名はオールドデビルなれどデビル懐かし従順なる姑  
鯽の身を細かくほぐし姑の口に運べばその目優しも

三月

時の流れ

去年為し得しことも終らで暮るる日々残れる生の軽き噛みしむ  
匙を手に姑の瞼下を待ちみたる時の流れの緩きひととき  
投薬の後に一粒ドロップを入れやる姑のしほめる口もと  
ゴゴゴの空爆を告ぐる目覚しのラジオに思ふ無明の人の世

四月

バスを待つ

春雨の中両の手にデパートの重き袋を下げ歩み行く  
昼下がりのバス少なくて一刻も待つは余儀なき北薩への家路  
ただ待てる刻空しけれど歌心呼び出す難し雑踏のバス停  
ロッセリアの雨の窓辺にコーヒーのカップ片手に一人バス待つ  
流れ行く車の列と人の群れただ眺めあるコーヒー冷めるも  
せかせかと文明は刻を蝕めり心も刻もゆとり有れかし

五月

名古屋城

堀外の古木の桜の並木道権勢偲びつつ青葉影行く  
仰ぎ見れば金鯨の天守の新しきしつかと立ちて我等迎ふる  
清正の石も積まれし名古屋城空爆の補修も痛ましきかな  
御三家の筆頭流石とその規模に往時しのびぬ五月晴れの朝  
天守閣エレベータにて登り見れば名古屋市街は鯨詰めのはし群  
金縁の青きカップの皿のみの一枚を亡母の形見と持ち来る

六月

姉と慕ひし

忽然と君逝きしてふ声もなき我が目に揺るる合歡の薄紅  
史跡 清色 城跡  
忸怩たる我を励ます君が文姉と慕ひし君逝けるとは  
君が手になるチケットの振込の用紙を受くる君の通夜の日に  
むせる如き花の香りに包まれてやや眉ひそめ君は眠れり  
一言の別れも言わず妻逝くと眉震わする寿官に涙す

## 壇の浦

壇の浦いにしへ偲べば空海も重く黙して波も光らず  
白旗の小舟に囲まる赤旗の船の悲劇ははずちと見渡す  
ビル並ぶ二つの街を裂く潮に問はばや平氏の最後の戦を  
人の世の血をもてなせる争ひの長き歴史は絶ち切れずとや  
五月雨に浮かぶ島影長くして岬と紛ふ安芸の宮島

## 年金生活

定年後ロフン全集読み通すその日夢見て勤め励みし  
分刻みに身支度整えバス停に駆けつけし日々もただに懐かし  
お勤めは努めなりとて寝不足の朝もバスに遅れじと走りし  
ご機嫌の夫氣にとめずや終電の遅きを待ちめて寝そびれし妻を  
有給の休み少なき中途入社気力で出社せしかの日は若かり  
昼下がりの連絡会議の対面は課長なれども睨は開かず  
工場の心臓部なる電算室紅一点にて気負ひゐたりし  
三十年以前は均等法未だ無く男女の差別に抗いし日々  
子育ての片手間仕事とは言はせじと抜き出し事をなし遂げて来し  
QCの賞状五枚も授かりしは二万の社員に我のみと思ふ  
食費学費家賃月賦に仕送りと子ら五人なる家計重かりし  
産休の後も仕事を続けしはわが他一人てふ昭和四十年代  
朝夕を乳母車にて保育園に送り迎えし娘もはや巣立ちぬ  
五人の子それぞれの個性それぞれに育ち巣立てることは嬉しも  
妻、母と会社勤めの三役を為し終えし今を余生とは思はじ  
今こそは己れの刻をば持つべけれ我がため他のため五分と五分とに

ブルル期のブルルの金にて訪れし異国の名所は老人多かり  
誇らしげにキャンピングカーの中見せしグラントキャンオンの好老夫婦  
スペインのホテルのホールの薄間にブルース踊れる米老夫妻  
いざ定年未だ見ぬ世界の旅希へとブルルは消えて年金生活  
ボーナスの無き窮屈を思ひ知る働き場所なき夫の故郷に  
月々のサラリー振込みなきものを電気、電話と変わらず引き落つ  
偶数月半ばに支給の年金の家計収支に漸く慣れたり  
本棚のロンドン全集打ち眺め手に取る暇もなきを怪しむ  
友よりの一冊の本の読了も思ふに任せず過ぎ行く日々かな  
酔客とより酔ひ痴れたれるわが夫を相手に月日は駆け足にて過ぐ  
年若き同性の私のファンありて職場の近況告げ来る嬉しも  
寝たきりの姑あれば海外の旅夢なれど希望は捨てまじ  
心狭き西南の果ての人中に我独りなるをさして悩まず  
歌の道歌の師ありてひとしほに心豊かと思ふこの頃

十月

喪の帯締むる

亡母譲りの喪の帯締むる姑を送る朝は静かに晴れたり  
いひの日かこの日あるとは知りしも迂闊に日々を過ごせしを知る  
若き日は美貌たりしと姑のづからの語らふ席和やけき  
白き布敷きつめられし三十畳喪の客去りて秋の陽淡し  
足音を忍ばせてふと姑の今は亡きこと気づく夜半あり

十一月

旅への誘ひ

新聞の旅への誘ひ眺めつてはしの思ひ出我を慰む

兵馬傭のドームの中の隊列に権勢てふを思ひ知れる日

夕暮れのライン河沿ひの列車なか友と経費の割り算せし日も

日没のグラントキヤオン青褪めて俄に風も荒れ冷たかり

ガウデイの教会の塔より眺むれば埃じみて見ゆバルセロナの街

生、性、食、その味はひは語り得ず記憶も夢も我のみのもの

十二月

亡姑(はは)の部屋

満中隠法要過ぎて片付けし姑の部屋は空しく広し

薄青くベッドの脚あと残りたる畳の凹みもいつしかぼやけて

胸を刺す一言ありて長居すまじと思ひし亡姑の部屋より庭見る

亡姑の部屋戸障子全て開け放てば冬の陽深く射し込み清し

二〇〇〇年

八代古城

八代の古城の坂をよぢ登れば山頂未だし後ずさり行く

息切らせ登りし古城は人かげもなく傷みし展望台のみ

眼下には球磨川緩く分岐して街分かちつう海に溶け入る

八代の街を遙かに見下ろせば球磨の川面に春の陽淡し

戦乱の名和氏相良氏戦ひし尾根長々と辿り戻れり

勝鬨橋

早春の白く塗られし勝鬨の橋行く我に川風柔し  
白々と塗られし橋よ昔日は鉄重々しく開閉せしなり  
隅田川両の岸辺は高層のビル冷え冷えと日に映え並ぶ  
隅田川立ち並ぶビルの一角にかもめ群れゐるは築地魚市場  
勝鬨の橋の袂に娘の新居ありて渡れり春風を背に

## 日枝神社

裂帛の笛のしじまを貫きて蔽けき気配満つる御社  
奉紙にて黒髪束ねし白皙の巫女のつなじに早春の風  
小賀玉の黄金の鈴をうち鳴らしゆるゆる舞へる巫女うら若き  
御簾の陰笙笛太鼓の楽土らは古式床しき舞楽奏でる  
ビル群の谷間に石の大鳥居お江戸の鎮守日枝神社てふ  
娘と婿とその両親と夫と我六人の立つ日枝の神前  
初老なる神主の祝詞朗々と末の娘と婿の契り報ぜり  
ぎこちなく玉串捧ぐ婿と娘の背を見つめる八つの眼  
神前に眼閉づれば込み上ぐる四半世紀の娘への想ひの  
四十路近く授かりし娘は神妙にかうべ下げゐる春衣着て  
春空のおぼろの青に紅花を散らせし衣に娘も花となる  
大いなる神に謝すべし三男二女みな健やかに巣立ちたりしを  
上の子は疾くと育てと末の娘は育つ惜しみしその娘今嫁す  
生き馬の眼も抜く花の銀座にて婿は和食の店に挑みゐる  
銀座一の女将にならむとの娘の文に親は遙かに十ル送るのみ  
婿の母と我は故郷の同級生面影変はらず淑やかなる友  
包丁の道を選べる次男坊に友は全てを懸けて店出す

温かき親の支援に必ずや応へるならむ若き二人は  
神殿を出づれば重き雲薄れ若き一人に淡き春の陽  
娘の姑嫁の母たる友と我やや複雑な笑み交はし合ふ

### 吾平と高山

せせらぎの若葉映して輝ける奥に鎮まる吾平みささぎ  
深々と緑抱ける岩蔭に神眠らするとの伝えゆかしき  
肝属の高山の城跡年を経し木々の森たり杖つき登る  
高山の城址の本丸に集いたる人々の肩に揺るる木漏れ日  
軍勢を集め数へしてふ丘に立ち甲冑のきらめく幻を追ふ

### 新しき墓地

墓地改葬なれる法要に集ひたる人々の群に五月雨無情  
それぞれの思ひ籠めたる百余基の墓標新たにはればれと並

ぶ

大雨に水浸したりし道脇の墓跡ははや国道の下

朝な夕な墓参の人の絶えずして飾られし供花は競へる如く

に

ありし日はいさかひ多かりし舅姑の一つに眠れる三十年を経

て

七月

スタンドバイミー

ワイプロの画面に一人向かふ夜半よ不意の雷鳴轟きて雨

沛然と降る雨音の強弱の潮のごときを聞きつつキー打つ  
一人座す我が目交ひの亡父亡母や友らは告ぐる挫けるな  
かれと

故郷となすべき地なれば声のなき声にて叫ぶスタンドバイミ

夫の言ふ「徳は孤ならず」をしみじみと胸痛きまで噛みしむ  
る日々

八月

末娘

息を飲む美しさなりき吾娘なれど白きドレスの輝き凌駕

す

はればれと結び上げられし前髪に白銀の飾りきらめきてあ

り

我れ先に花嫁と並びスナップを撮りてと人垣娘を囲みある

末の娘よゆつくり育てと願ひたりし今巣立ち行く感慨新た

に

円卓に揃へる上の子らはみな親となれるよ我が孫七人

九月

唐津城

唐津城登りて海を見下ろせば虹の松原霧雨の中

白き浜虹の松原眺望の前に雑ビル雨の唐津城

昔には無かりしに作れる天守閣立派なれども何故か虚し

き

史跡 清色城跡

展示場に並べる豪壮な曳山は唐津の栄華と意気語るなり  
祭りありて故郷へと逸る血の湧くを我も知るなり唐津の  
若衆よ

伯楽も会ひ得し名馬も幸せと明るく祝ふマラソンの金

### ソウル警見

日韓の交流ミッションのせわしなき合間にありしソウル見物  
夫生れしソウルの街の喧騒を異国と思へずしばし佇む  
少年の夫の写真の大通り南大門はビルに埋もれて  
その上の玄関たりし南大門今は車の蛇口の如し  
大道に物物物の溢れゐて肩触れ過ぐるソウル下町

### 十月

### 鉄舟の襖

百年を土蔵に眠りし鉄舟の六枚の書の包み届けり  
簡便な宅急便にて鉄舟の書ははるばると薩摩に下る  
鉄舟の間を作らむと広げ見る書の躍動は我が鼓動たり  
鉄舟の間に独り座しその夢を我に託せし祖父母偲べり  
ゆかりある西郷の地に納まれる鉄舟の書の運命奇しき

### 十一月

### 織月沈む

身内一人また逝きて立つ空港のバス待つ肩に晩秋の風

寒風に雲一つなき夕空に二日の月の淡く輝く

上京の度にこれが見納めと老し叔父叔母訪れて来しが  
卒寿越せる夫婦稀なりと寿ぎて五月も経ず忽然と叔母  
逝く

仄かなる残照にしるき稜線ののびやかな影に纖月沈む

十二月

人吉旅情

球磨川の流れ緩めて旧き世の名残り写せる人吉の町

銀杏落ち葉敷き詰められし階を登れば相良氏歴代の墓

七堂を灰塵に帰せし丁丑の役恨らまざる情ある町よ

敗走の西郷さんの留まりて焼かれし永国寺は山門新たに

桃山の茅の山門過ぎ走る銀杏の並木は黄金の吹雪路

年の瀬の訃報

年の瀬の酒の客らの歓談のさなかの電話は叔父の訃を告ぐ  
血縁のただ一人の叔母よりも我に優しかりし叔父も逝け  
るか

史跡 清色城跡

東大の建築科卒の最長老九十六歳なれば天寿と言ふべし  
遠くより別れを告ぐと甲電を打ちてし我は祭りの舞まふ  
叔父上よ父母叔母とみそなはせ異郷を郷と我舞ふなれば